

第23回 書写山円教寺の紅葉狩り

2025 11/18





書写山へ

大久保駅

(JR)

姫路駅

(トル・買い物)

姫路駅(北口)BT

(神姫バス)

書写山RW(山麓駅)

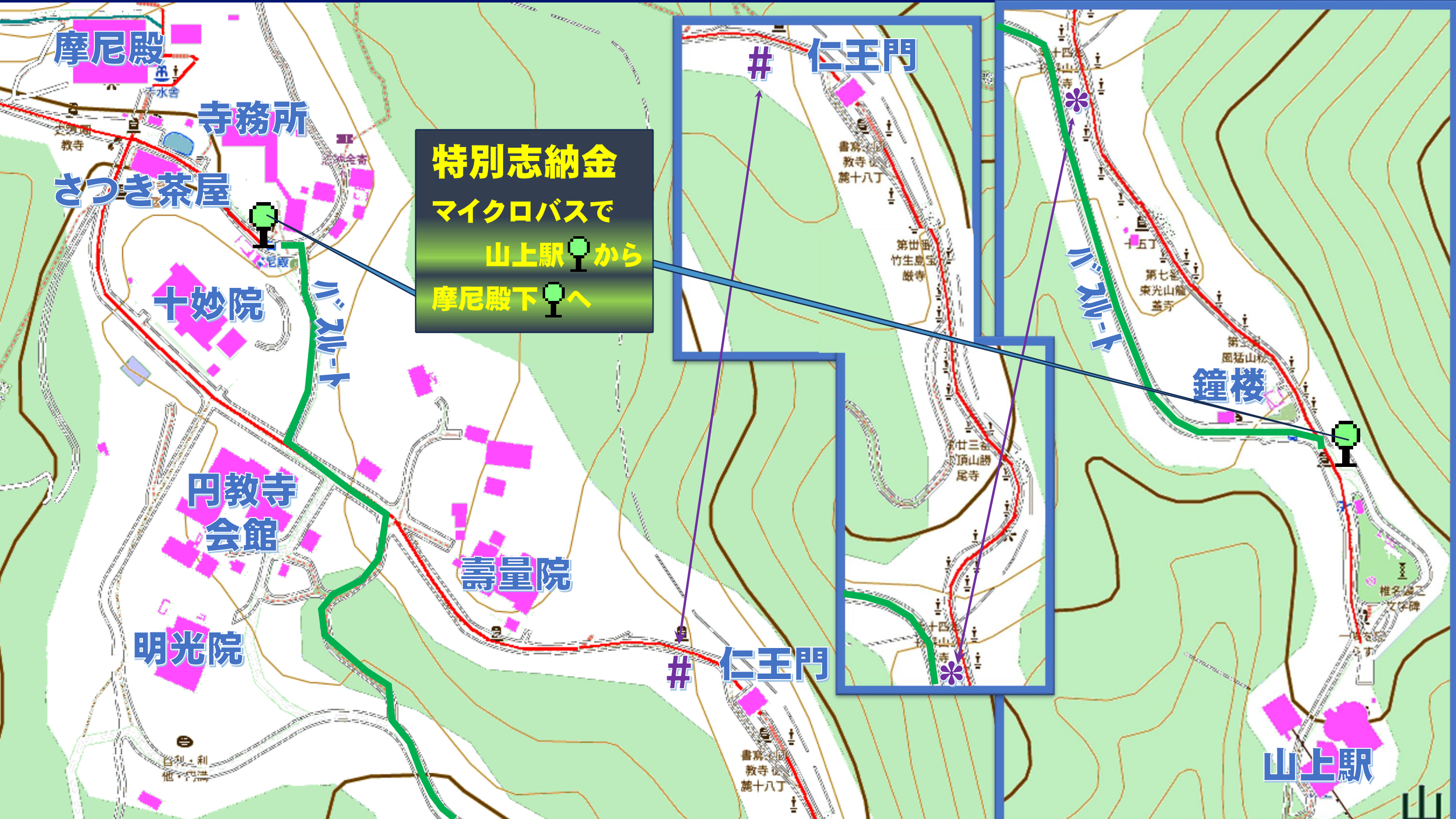
(ロープウェイ)

山上駅

(マイクロバス)

摩尼殿下





摩尼殿

寺務所

さつき茶屋

十妙院

円教寺
会館

明光院

壽量院

仁王門

鐘楼

山上駅

特別志納金
マイクロバスで
山上駅から
摩尼殿下へ

仁王門

#

#

*

バスルート

バスルート

自利・利他

書寫之
教寺
施十八丁

書寫之
教寺
施十八丁

第廿三番
竹生島宝
嚴寺

第廿三番
頂山勝
尾寺

第七番
東光山龍
蓋寺

第三番
風猛山秋

椎名之
文存碑

書写山円教寺といえば

なんといっても

次の和歌のやりとりで有名です。

【和泉式部の詠める】

冥(くら)きより 冥き道にぞ入りぬべき

遥かに照らせ 山の端の月

【性空上人の返歌】

日は入りて 月まだ出ぬたそがれに

掲げて照らす 法(のり)の灯(ともしび)



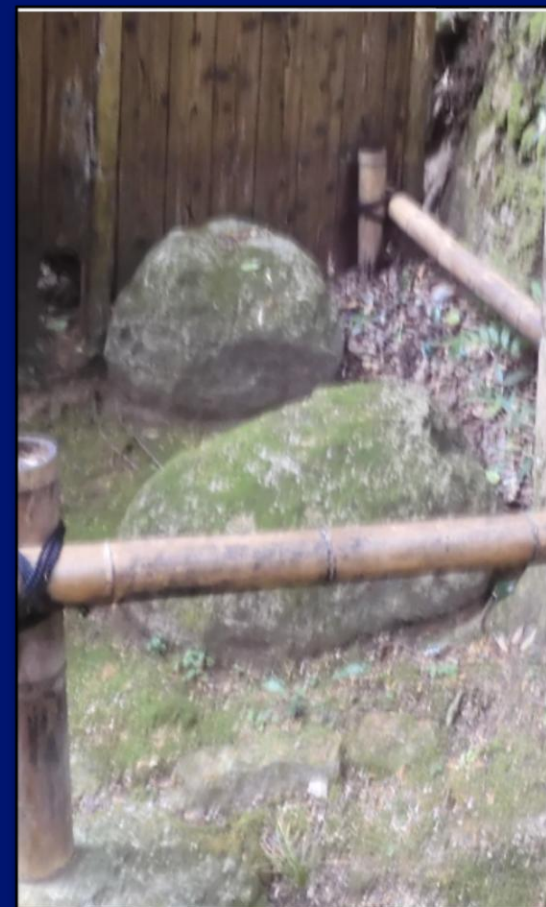
和泉式部供養塔

(開山堂の北側)

性空は、俗事を避けて生活していた一方
逆に、和泉式部は問題の多い女性、
性空は居留守を使ってまで
会いたくなかったという。

ところが、和泉式部の和歌で一転、

式部の歌で、真摯な本意を知ったという
のが、劇的というか
当時の和歌に対する価値・力なのでしょう



護法石
(弁慶のお手玉)

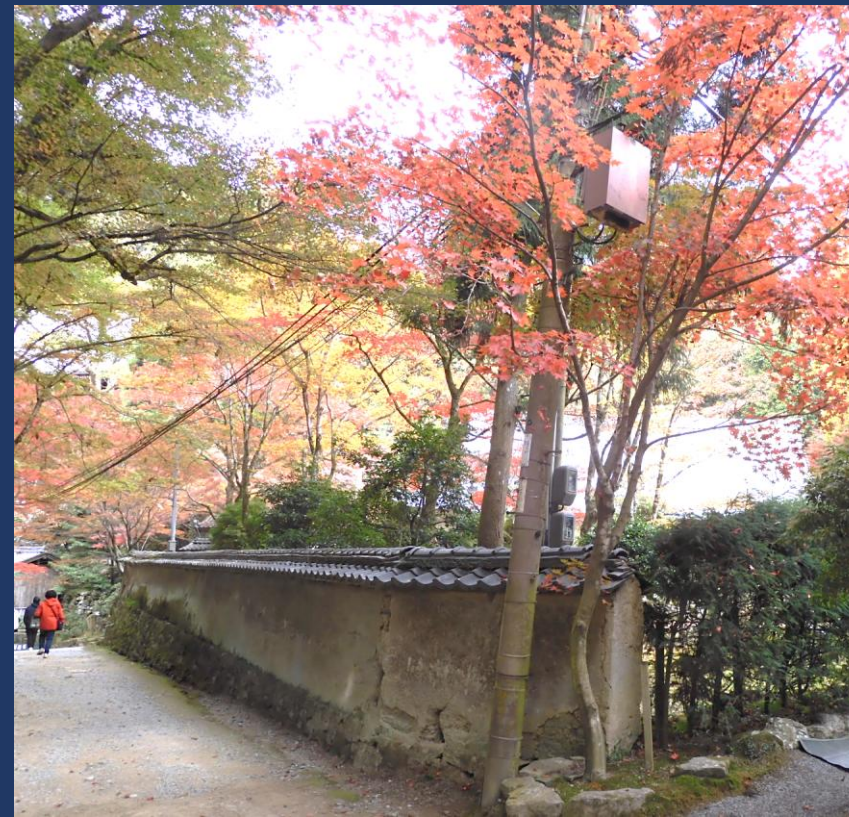
書写山円教寺は、性空が開いた寺ですが
そのはるか以前から、山頂に「素戔鳴(スサノオ)」が
祀れていて、山は「スサの杣(そま)」と
呼ばれていたそうです。それゆえか、
麓の村の名が「曽左(そさ)」で、そこから、
当初、この寺の名を「書写寺」と称したそうです。
「円教寺」となるのは、花山法王がここを訪れ
円教寺の勅号を与えてから以降である。

すぐ隣の峰相山には、奈良時代から戦国時代まで
「鶏足寺」という新羅系の大寺があったそうで、
「スサノオ」もまた。新羅由来の神との説もあるので、
それらと円教寺とは関連があるのかも知れません。



石造笠塔婆

阿弥陀如来の浮彫がある



書写山上で
バスを
おりてから
摩尼殿下まで
少しだけ
歩きました。



摩尼殿は
懸崖造りの
建物で
迫力あります。



記念撮影





摩尼殿の
登り階段が
今日の
一番の難所

摩尼殿から
三之堂へ





書写山の大仏



三之堂の紅葉を
眺めながら昼食





(奥之院)へ

拜殿

《白山峰》

拜殿

常行堂

墓所

大仙

金剛堂

鐘樓

墓所

十地院

藥師堂

墓所

大黒堂

瑞光院

摩尼殿

寺務所

さつき茶屋

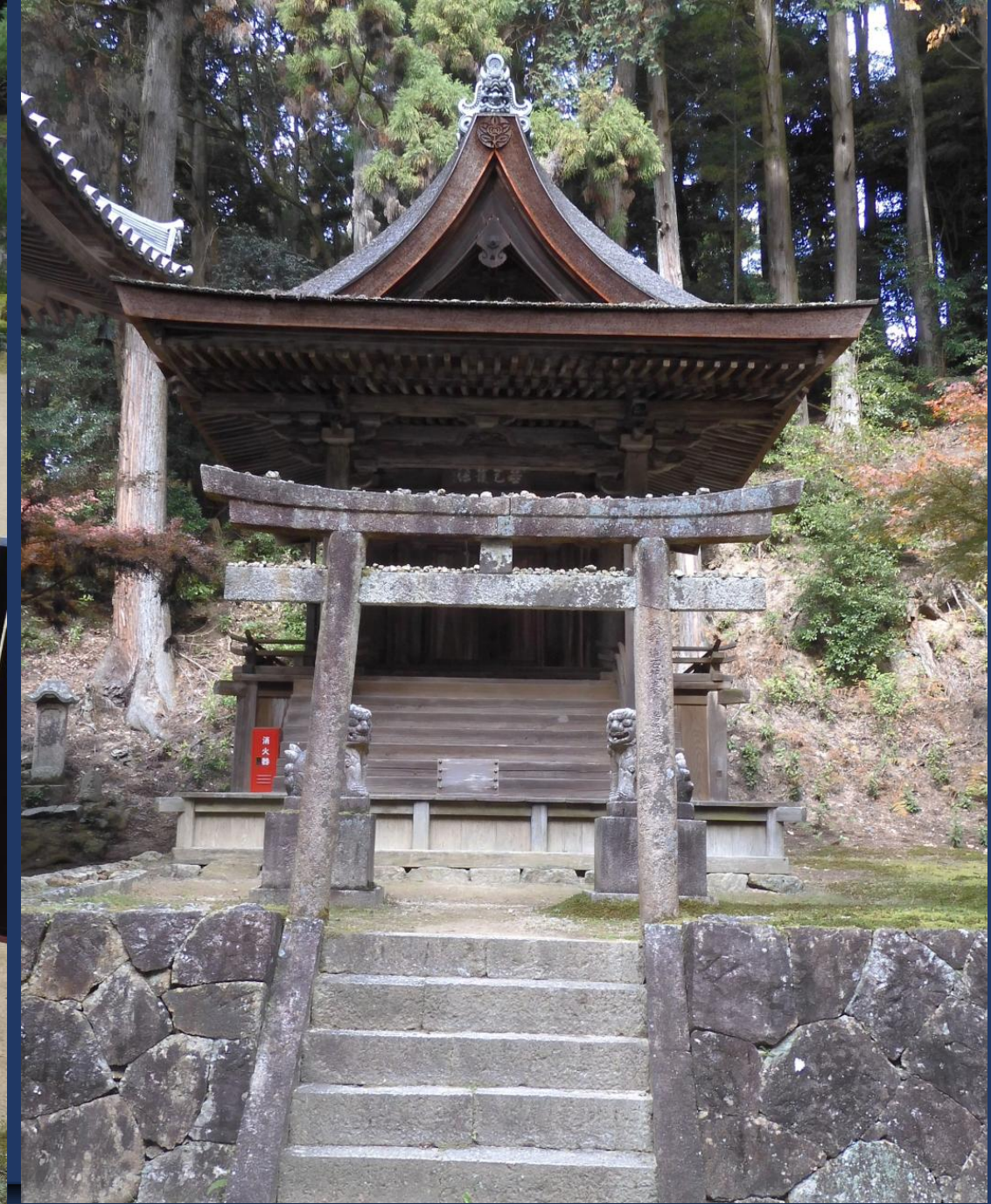
十妙院



三之堂から
開山堂(奥之院)へ



三之堂から
開山堂(奥之院)へ



護法堂(乙天社・若天社)重文

乙天（おとてん）・若天（わかてん）

乙天は、不動明王の化身（青鬼の姿）、

若天は、毘沙門天の化身（赤鬼の姿）とされ、

性空上人の左右に侍した護法童子である。

護法童子とは、荒ぶる鬼神でありながら

修験や密教の高徳の行者に使役され、

その身を守り意を体して働く童形の鬼神をいい、
すなわち

「鬼でありながら護法の善神」である点に、

この童子たちの性格がよく表れている。

山中で長く籠居し厳しい修行を積んだ性空のもとに、

天童のごとく現れて薪水を運び外敵を退け、

上人の法力を体現する存在として崇められた。



護法堂(重文)のうち
乙天社



堂の横にある石塔

重要文化財の
開山堂の建物は
こんな感じ



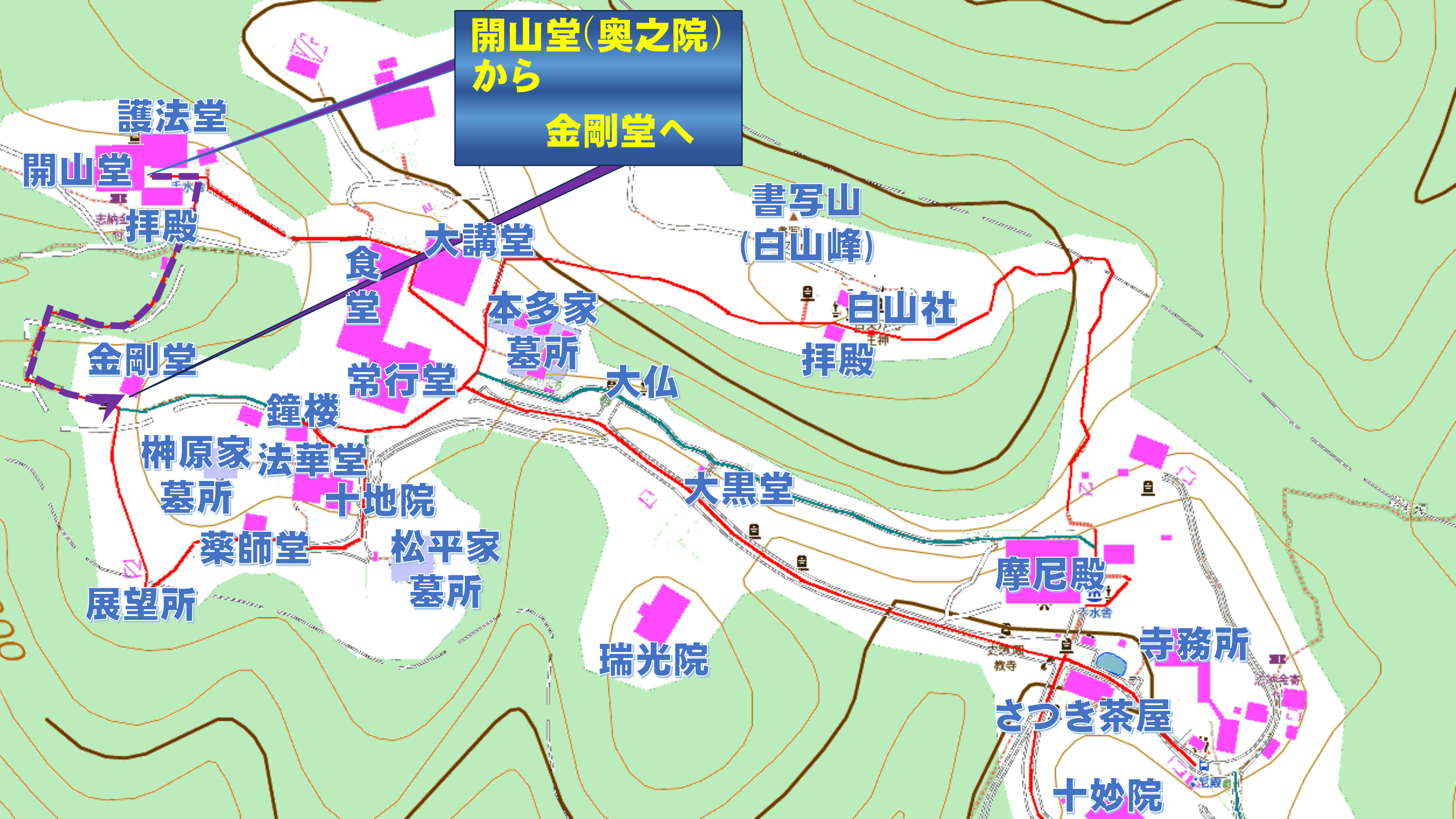
和泉式部の石塔

参った人たちは
何を祈って
いるのでしょうか



開山堂の堂内は
暗くて見えない

開山堂(奥之院)
から
金剛堂へ





往時の道標(左:刀で坂、右:行者道)



金剛堂あたりの紅葉

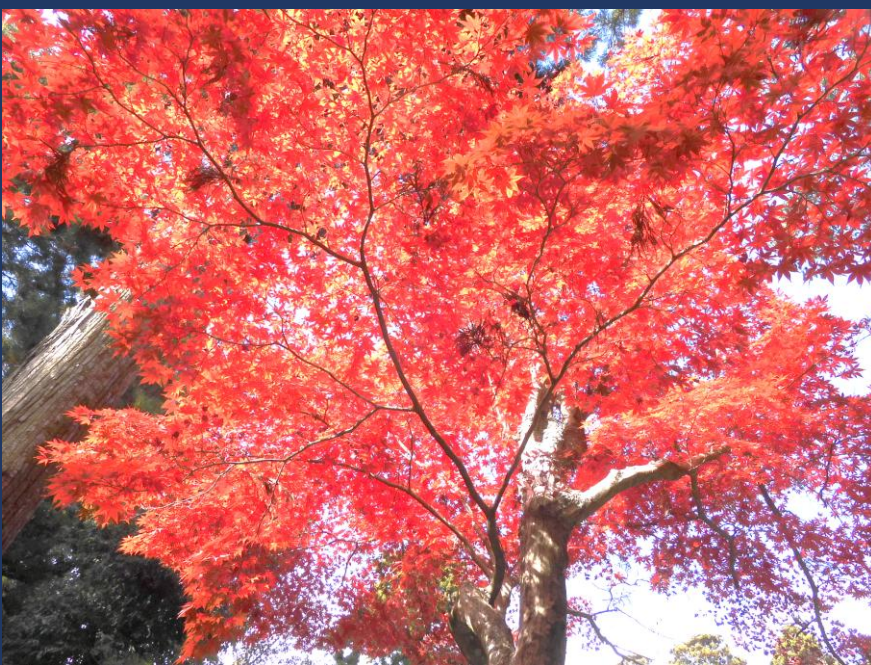


金剛堂(重文)

元普賢院の持仏堂。
性空上人がかつて
ここに住んでいた時、
「金剛薩埵菩薩」が
ここに訪れ、
金剛界曼荼羅と
退蔵界曼荼羅を
表す神聖な印相を
伝えたと言われる



西谷(摩尼殿以西)散策





鐘楼(重文)

屋根は入母屋本瓦葺の
袴造りで、
銅鐘の再鑄から
14世紀前半の再建と
推定されている。
ここで、手づくりの
菓子等をいただいた。



播磨灘を望む



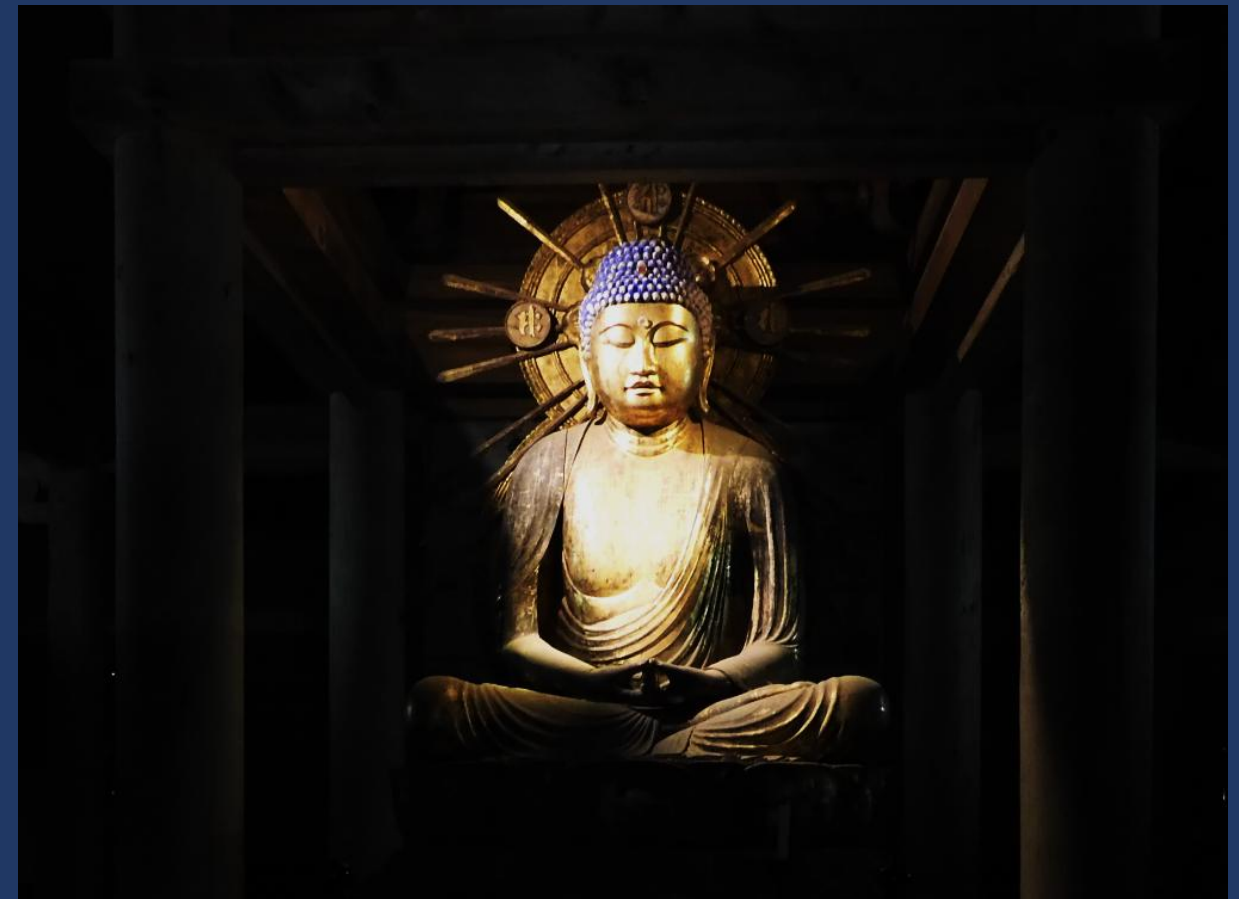


十地院

法華堂に隣接して建つ
江戸時代は、開山堂の
西にあった。

「映画」

ラストサムライでは
トムクルーズの
休憩所になった



常行堂の阿弥陀如来

常行堂では、阿弥陀如来像の周りで
阿弥陀経を唱えながら周るという
修行で、短い食事、休憩を覗き
90日間行うという修行である



食堂の拝観

昔は有料拝観だったのに、無料という。

ここで

「性空上人」像に
会えたのはラッキ !!





















↑ 食堂2階から講堂を見る

← 大日如来像



護法堂
開山堂
拝殿

書写山
(白山峰)
白山社
拝殿

大講堂
食堂
常行堂
本多家
墓所
大仙

金剛堂
鐘楼
法華堂
十地院
松平家
墓所
藥師堂
展望所
榊原家
墓所

大黒堂

摩尼殿
寺務所
さつき茶屋
十妙院

瑞光院

三之堂から
書写山山頂へ



山頂の白山社
書写山の山頂は
なぜか
白山峰という名。
山頂には白山社がある

白山権現



大講堂、摩尼殿について性空上人が第三の吉所としたところで、上人はここで六根清浄の行をつんで心眼を開いたとされる。それにちなんで一月十八日の修正会（鬼追い会式）では、主役の赤鬼、青鬼が、先ずこの白山権現に来て神域をまわりながら四隅でたいまつたいまつの明かりを振りかざす。

この地には、性空上人入山以前より祠があつた。それは素盞鳴尊すさなりのみことをまつる堂であつた。これは神の時代素盞鳴尊が、この峰で一宿されたと伝える。故にこの山を「素盞すさなの杣そま」と呼んだ。書寫山の名は、これに由来するといわれる。

書写山山頂への道 木の根が出ていて結構歩きにくい。

ここでの青鬼・赤鬼とは、乙天と若天なのだろうか



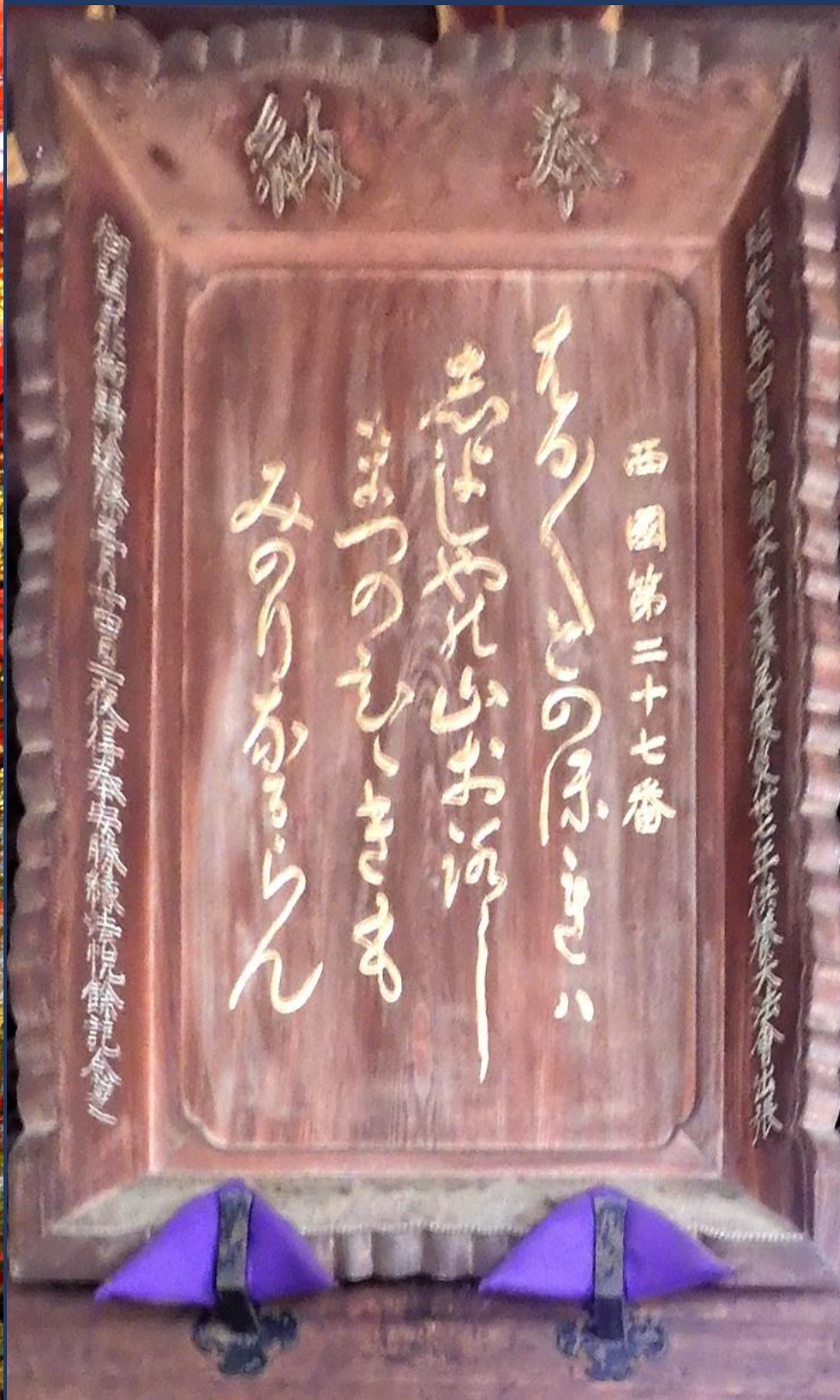
書写山の下り
こちらの方が、
坂が長くて急。
若い人なら、
難なく下れるが…



書写山山頂から
〈健脚班〉摩尼殿へ

三之堂から
〈慎重班〉摩尼殿へ





はるばると
のぼれば
しよしゃの
やまおろし
まつのひびきも
みのりなるらん



はるばると
のぼれば
しよしゃの
やまおろし
まつのひびきも
みのりなるらん



はるばると
のぼれば
しよしゃの
やまおろし
まつのひびきも
みのりなるらん



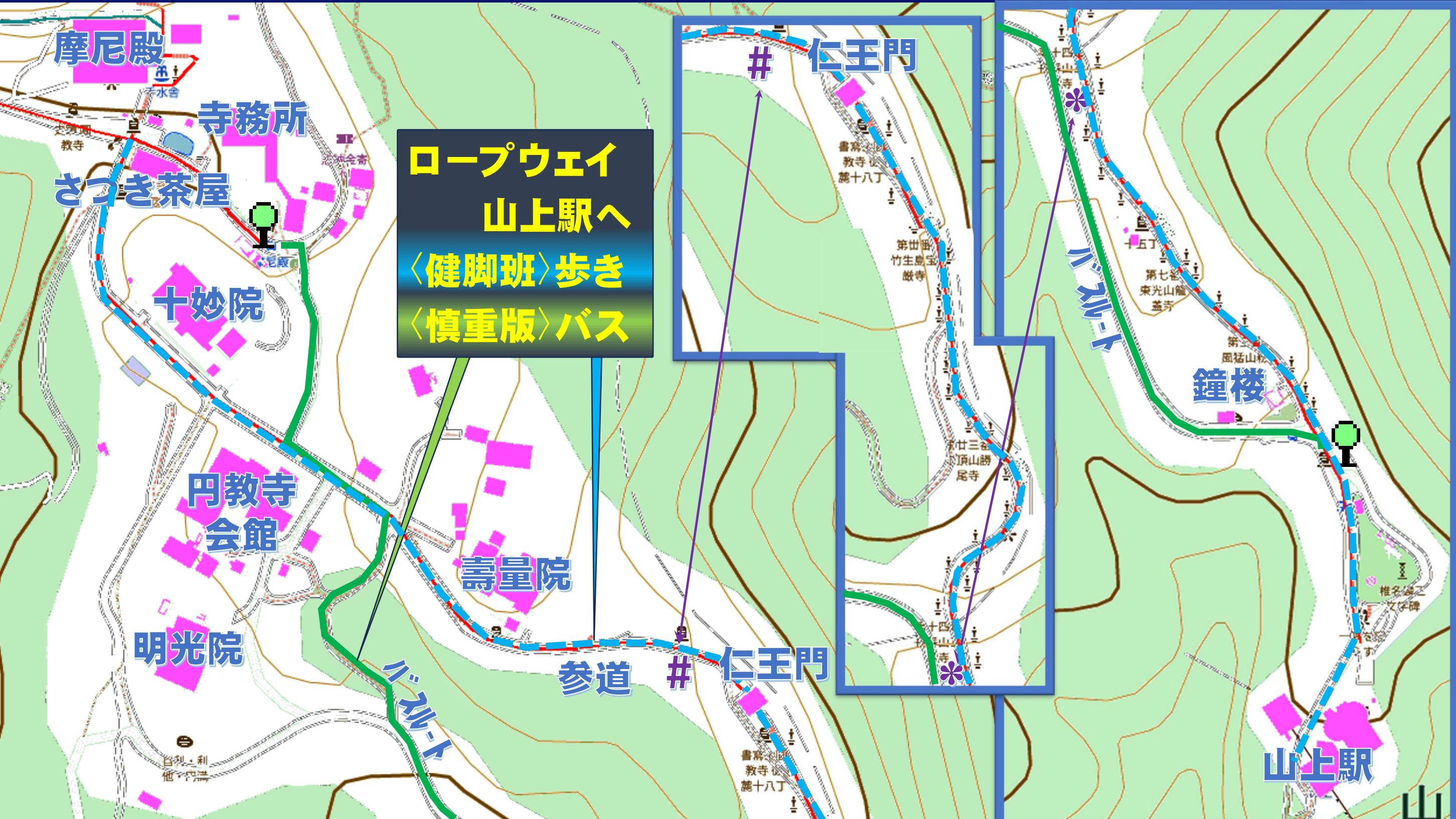
はるばると
のぼれば
しよしゃの
やまおろし
まつのひびきも
みのりなるらん



はるばると
のぼれば
しよしゃの
やまおろし
まつのひびきも
みのりなるらん



はるばると
のぼれば
しよしゃの
やまおろし
まつのひびきも
みのりなるらん



摩尼殿

寺務所

さつき茶屋

十妙院

円教寺
会館

明光院

壽量院

参道

仁王門

仁王門

鐘楼

山上駅

ロープウェイ
山上駅へ
〈健脚班〉歩き
〈慎重版〉バス

バスルート

バスルート







完歩拝観を感謝して鐘を撞く



書写山上より
ロープウェイで下山
山麓駅で一旦解散。
健脚者は旧女人堂へ
江戸時代まで、女性は
ここへきても、女人堂まで、
山上へ行けなかったのです。



如意輪寺

「守護使不入」の文字は
円教寺の權威の
高さを物語っている

如意輪寺の文化財

一〇〇二（長保四）年に書写円教寺開祖性空上人が開基の古刹で、本尊は六臂如意輪観音菩薩である。

一三九八（応永五）年書写山は女人禁制となり、心空慈傳上人は女人堂を建立し、女人巡礼の札所とした。



姫路市指定重要有形文化財（彫刻） 平成八年十二月二日指定

如意輪観音菩薩半跏像 一 軀

時代 観応二年（一二五二）
作者 法眼康俊（運慶五代孫 東寺大仏師と号す）
法量 像高四一・〇cm 膝張二八・〇cm 膝奥二〇・八cm
品質 木造（檜材） 漆箔（頭髪彩色） 玉眼嵌入

宝冠をいただき六臂を有し、頭部を右方に傾け、右膝を立てる通形の如意輪観音菩薩半跏像で、髪部以外は全て漆箔仕上げとしている。
体部の構造は明らかでないが、像底に朱漆銘があり、観応二年十一月仏師康俊によつて造られ、願主は伝燈大阿闍梨権少僧都昌尊、開眼導師は書写長吏実祐であったことがわかる。南北朝時代の如意輪観音菩薩半跏像の好例である。



姫路市指定重要有形文化財（彫刻） 平成八年十二月二日指定

薬師如来坐像 一 軀

時代 室町時代
作者 不詳
法量 像高四八・〇cm 膝張四〇・二cm 膝奥三三・〇cm
品質 木造 寄木造 漆箔 玉眼嵌入

本像は右手は屈臂して施無畏印、左手は膝上に掌上を上にして与願印を結ぶ。左足を上に結跏趺坐する。作者は不明であるが、制作は十四世紀中頃と推定される。



姫路市指定重要有形文化財（彫刻） 平成八年十二月二日指定

聖徳太子立像 一 軀

時代 鎌倉時代から南北朝時代（十四世紀）
作者 不詳
法量 像高七七・〇cm
品質 木造（檜材） 寄木造 彩色

通形の十六歳孝養太子像と称されるものである。肉付きのよい丸顔で眉、眼にも締まりが認められ、孝養太子像特有の一種の厳しさをもっている。右手に執笏、左手に柄香炉をもつ。本像は十四世紀後半の作と推定される。

守護使不入石標

この石標は、元夢前川の東岸御立村と東坂本村の境に立てられていた。その後、西坂本村の「おりと橋」の横石に用いられていたものを移したものである。

「守護使不入」は書写山領へ守護使が入ることができないことを傍示したものである。

石造地藏菩薩立像

書写山道が旧因幡街道の横大道から分岐する夢前川畔の地藏堂に祀られていた「河原地蔵」が一八八二（明治十五）年、水難により破損したので、如意輪寺境内に移されたものである。



守護使不入

古図に「常念仏」とある
念仏堂が、明治時代に
野口の教信寺の本堂に
移設されたことはあまり
知られていないようです。

常念仏

引雲園

下馬

女人堂

八王子社

御車寄

池



書写の山を背景に建つ東洋大姫路高校



帰りは
東洋大姫路高📍から
姫路駅までバスに乗り、
JRにて大久保まで
無事帰ってきました。

第23回 書写山円教寺の紅葉狩り

2025 11/18

おしまい